

よりのそう



2012.5.29(火)
第180号

編集責任：
キヨ子の容子

大船渡

『ボランティアをおえて』

埼玉県から来た草野と申します。
5月16日から約2週間、こちらでボランティア活動力を
させて頂きました。

昨年の震災当時、私は東京の大学で夜までサークル
活動をしていました。とんでもなく大きな地震だとは思
いましたが、その日の0時すぎごろにテレビを
見るまではこんなに被害が大きかったとは思わず、
火の海になった町を見て言葉を失ったことを覚えて
います。

それから1年以上経ち、ようやく今回被災地に来る事
が出来ました。

こちらに来るまでは、『震災から1年以上も経った今、
私に出来ることがあるだろうか?』という思いも
正直ありました。

私は震災当時、津波で流された家や車、火災、
増えつづける死者・行方不明者の数を連日メディアで
見続けていました。

その時の衝撃が大きすぎて、1年後の一見落ち
ついたように見える被害地のようすや、復興に
向けて以前の事業を再開する人などをテレビの
特集で目にした時、『被災地はもう大丈夫な
のかな?』と思い込んでしまいました。

しかし、実際にこちらに来て、映像や写真で目に
する被災地とは全く違うことを実感しました。
一見落ちついて見える場所にも、まだガラス片がちら
はっていたり、畑を堀りかきとリギがうまっていると
危なく、行き場のないガキの山がこんなにあった
のかと、『復興』というのがどれだけ難しいかを知りました。

そして、現地の方とお話をする中で、家が流されて
しまったこと、友達が流されてしまったことなどを
聞き、『もし自分が、家や家族、友人、仕事など
生活の基盤を一度に失ってしまったら、たった1年で
立ち直れるだろうか?』と考えた時、『1年も経て
から、ボランティアなんて...』とどこかで思っていた
時分が恥ずかしくなりました。

私は、メディアで目にした津波のすさまじさや、亡く
なった人たちの数にばかり目をうばわれていて、
そこに今も生きる人たちのことを考えられていたかた
のだということに気付きました。

被災地復興は着実に進んでいると思いますが、
被災者の人たちはまだまだ多くの不安を抱えて
住んでいることを忘れないようにしようと思います。
そして、これから復興支援のことを考える時には、
まず、そこに暮らす人たちの立場に立って考えていこう
と思います。

最後に、一緒に活動してくれたみなさま、
暖かく迎えて下さり本当にありがとうございました!
またお会い出来るのを楽しみにしています。

草野真琴



夕
水
天
気
晴
れ
の
空
雲
く
気
温
最
高
19℃
最
低
11℃
降
水
確
率
11
10%
2
20%

※5/30(水)ボランティアミーティングはPM5:10 男性棟

5/27(日)活動者数 : 77名
5/28(月)宿泊者数 : 46名

くわしくはHPへ